

平成 9 年度

埋蔵文化財緊急発掘調査概報

垂 水 遺 跡

昭和町遺跡B地点

都 呂 須 遺 跡

高 城 遺 跡

1998年3月

吹田市教育委員会

序

吹田市におきましては、昭和49年度国庫補助事業の埋蔵文化財発掘調査以来、年々増加する開発行為に伴い、数多くの発掘調査を実施してきました。

平成9年度におきましては、国庫補助事業として3件の発掘調査を実施しました。これらは、ともに専用住宅の建築を契機として実施したものです。

これら3件の調査地は、ともに吹田市の南部に位置し、市内でも早い時期から個人住宅が建ち並んだ地域であります。今後、吹田市では、これらの地域をはじめとして、住宅の建て替え等の工事が増加していくものと予想されます。こうした状況にありましては、住宅の建築の計画や工事の中で、事業者の方々が埋蔵文化財の保護という問題に直面される場面も多くなるものと思われます。

本市教育委員会におきましては、こうした問題の調整を諮るべく日々努めておりますが、これを円滑に進めていくためには、やはり市民の方々のご理解を得ずにしては困難なものといえます。

市民の皆様におかれましては、発掘調査をはじめとする本市の文化財保護行政に対し、今後ともより深きご理解とご協力を頂けますようよろしくお願い申し上げます。

平成10年3月

吹田市教育委員会

教育長 今 記 和 貴

例　　言

1. 本書は平成9年度国庫補助事業として実施した、昭和町遺跡B地点、都呂須遺跡、高城遺跡の緊急発掘調査をまとめたものである。また、平成8年度に国庫補助事業として実施した、垂水遺跡の発掘調査についても併せて報告する。
2. 発掘調査地点は次のとおりである。

(平成8年度)

垂水遺跡 吹田町垂水町1丁目714-2、4他

(平成9年度)

昭和町遺跡B地点 吹田市昭和町1281-15、16

都呂須遺跡 吹田市内本町2-805-2

高城遺跡 吹田市高城町1384-1

3. 発掘資料の整理作業は、吹田市岸部北4丁目10番1号、吹田市立博物館内資料整理室において実施した。整理にあたっては、花崎晶子、海邊博史、長谷部裕子、大西文代、小林久美子、高井明美、秋山芳恵、中川 泉、林 裕子、木船安紀子、小林 瞳らの協力を得た。
4. 本文の執筆は、第1、2、4章 賀納章雄、第3章 西本安秀、第5章 堀口健二が行った。
5. 図中の方位は磁北を示し、標高はT.P.（東京湾標準潮位）を示す。
6. 発掘調査において、西田正彦、西田仁志、三柳 寛、吉井正明、片山鍊三氏をはじめ、多くの方々の協力を得ました。記して謝意を表します。

発掘調査参加者名簿

調査主体 吹田市教育委員会

調査指導 大阪府教育委員会文化財保護課

調査担当 吹田市教育委員会吹田市立博物館文化財保護係 西本安秀・賀納章雄・堀口健二

調査員 今村 悟・竹谷俊彦・藤井信之・吉村達夫

調査補助員 大村 武・小田尚幸・小花和朋子・工藤友紀・佐藤健太郎・玉井義也・丹羽まさか・村上成幸・小川里美・桑原暢子

目 次

第1章 平成9年度埋蔵文化財発掘調査の契機	1
第2章 垂水遺跡の発掘調査	2
第3章 昭和町遺跡B地点の発掘調査	12
第4章 都呂須遺跡の発掘調査	16
第5章 高城遺跡の発掘調査	19

挿 図 目 次

第1図 発掘調査地点	1
第2図 垂水遺跡発掘調査地周辺図	2
第3図 調査区平面図	2
第4図 調査区土層断面図	3
第5図 遺構平面図（第I面）	4
第6図 遺構平面図（第II面）	4
第7図 遺構平面図（第III面）	5
第8図 遺構平面図（第IV面）	5
第9図 遺構平面図（第V面）	6
第10図 遺構平面図（第VI面）	7
第11図 遺物実測図（1）	7
第12図 遺物実測図（2）	9
第13図 遺物実測図（3）	10
第14図 昭和町遺跡B地点・高城遺跡発掘調査地周辺図	12
第15図 調査区平面図	12
第16図 調査区土層断面図	13
第17図 遺構平面図	13
第18図 遺物実測図	14
第19図 昭和町遺跡出土土器実測図	15
第20図 都呂須遺跡発掘調査地周辺図	16
第21図 調査区平面図	16
第22図 調査区南壁土層断面図	17
第23図 遺構平面図	17
第24図 遺物実測図	18
第25図 調査区平面図	19
第26図 調査区土層断面図	20
第27図 遺構平面図	21
第28図 遺物実測図	22

図 版 目 次

図版一	垂水遺跡1
図版二	垂水遺跡2
図版三	昭和町遺跡B地点・高城遺跡
図版四	都呂須遺跡

報告書抄録

ふりがな	へいせい 9ねんどまいぞうぶんかざいきんきゅうはくつちょうさがいほう
書名	平成9年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報
副書名	垂水遺跡 昭和町遺跡B地点 都呂須遺跡 高城遺跡
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	西本安秀 賀納章雄 堀口健二
編集機関	吹田市教育委員会
所在地	〒564-0041 大阪府吹田市泉町1丁目3番40号 TEL(06)384-1231
発行年月日	西暦 1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東經 °' "	調査期間	調査面積m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
垂水遺跡	吹田市垂水町 1-714-2、4他	27205	86	34° 45' 46"	135° 30' 27"	19970108～ 19970208	45	建物の 建築
昭和町遺跡 B地点	吹田市昭和町 1281-15、16	27205	128	34° 45' 38"	135° 31' 47"	19970421～ 19970426	72	建物の 建築
都呂須遺跡	吹田市内本町 2-805-2	27205	91	34° 45' 18"	135° 31' 38"	19970515～ 19970610	105	建物の 建築
高城遺跡	吹田市高城町 1384-1	27205	116	34° 45' 31"	135° 31' 59"	19970902～ 19970911	84	建物の 建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
垂水遺跡	集落遺跡	弥生時代 中世	溝、土坑、ピット 落ち込み	土師器、瓦器 弥生土器	加工材を伴う溝の 検出
昭和町遺跡 B地点	集落遺跡	古墳時代	ピット、落ち込み	土師器、須恵器	なし
都呂須遺跡	集落遺跡	中世	溝、土坑、ピット	土師器、瓦器 須恵器	なし
高城遺跡	集落遺跡	奈良時代 ～中世	溝、土坑、ピット	土師器、須恵器 瓦器	なし

第1章 平成9年度発掘調査の契機

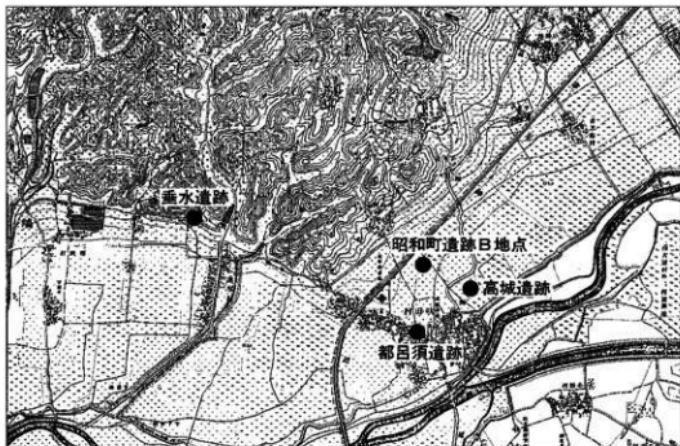
平成9年度は、昭和町遺跡B地点、都呂須遺跡、高城遺跡の3遺跡において発掘調査を実施した。これらの発掘調査はすべて専用住宅の建築に伴うものである。

昭和町遺跡B地点（昭和町1281-15、16）は、当初、高畠遺跡の周辺地ということから、平成9年4月10日に試掘調査を実施した。この結果、古墳時代の遺構・遺物が確認されたため、当地を新たに昭和町遺跡B地点として周知し、平成9年4月21日から4月26日にかけて、その拡大調査を実施したものである。

都呂須遺跡（内本町2-805-2）では、平成9年4月28日に試掘調査を行い、中世の遺構・遺物を検出したことから、5月15日から6月10日にかけて、その拡大調査を実施したものである。

高城遺跡（高城町1384-1）は、当初、高城遺跡の周辺地ということで、平成9年8月19日に試掘調査を実施したところ、平安時代から中世の遺構・遺物が検出された。このことから、高城遺跡の包蔵地域が当地まで拡大することが判明し、9月2日から9月11日にかけて、その拡大調査を実施したものである。

なお、本概報においては、平成8年度に実施した発掘調査のうち、平成9年1月8日から2月8日にかけて調査を実施した垂水遺跡（垂水町1-714-2、4の一部）の調査報告も併せて掲載する。



第1図 発掘調査地点 (1:40000)

第2章 垂水遺跡の発掘調査

1. 調査の経過

今回の発掘調査は専用住宅の建築に伴うもので、平成8年12月13日に試掘調査を実施し、弥生時代から中世にかけての遺物包含層を10層確認した。この結果、予定の建築工事が実施された場合、上位の遺物包含層が破壊されると判断されたため、上位6層の包含層を対象として拡大調査を行ったものである。調査は平成9年1月8日から2月8日にかけて実施した。

2. 調査の成果

a. 基本土層序

今回、調査の対象となった遺物包含層は次の6層である。

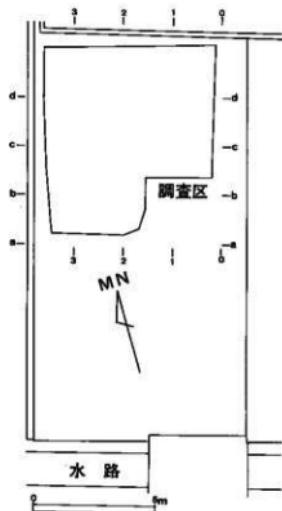
第I層：淡茶灰色（やや暗）～淡茶灰色砂質土層、第II層：灰色砂質土層、第III層：灰色（茶色がかる）砂質土層、第IV層：灰色（やや暗）砂質土〔白色砂混じる〕層、第V層：暗灰色～灰褐色砂質土層、第VI層：黒灰色～淡黒灰色砂質土層・黒色粘質土層。

これら包含層のうち、第II層と第III層については、調査区北側部分において、その堆積が認められた。また、第IV層は調査区北端では認められず、調査区の南側に広がっていた。これは、当調査地が南面する丘陵裾部の傾斜面上に位置することから、傾斜面の上方（調査区北側）と下方（調査区南側）において、土層の堆積に差異が生じたことによるものと考えられる。また、斜面の上方から流れ込んできたと思われる土砂が、調査区内に幾層にもわたって堆積し、こうした土層が各遺物包含層の間に堆積する状況がみられた。

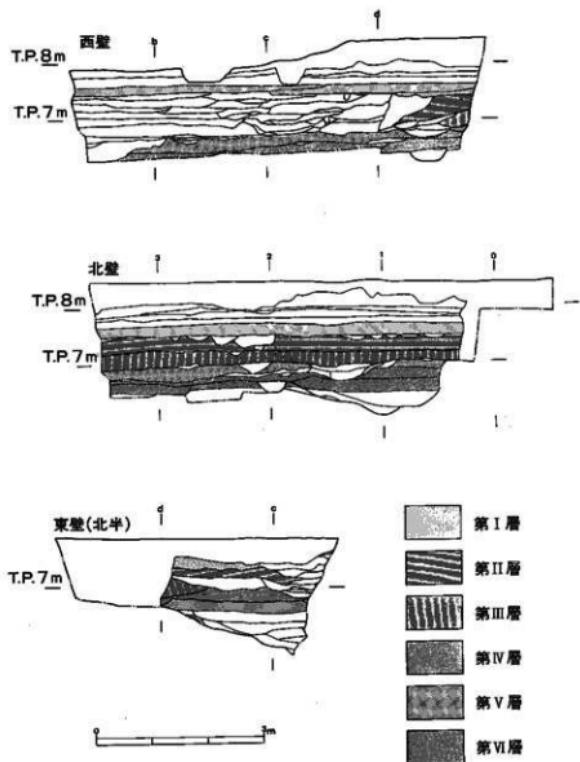
なお、第VI層に関しては、調査区北側を約1.5m幅で調査したものであるが、調査区の東壁と西壁に設けた側溝内の土層観察によって、第VI層も調査区域に広く堆積することが認められた。また、東壁側溝の土層観察から、第V層と第VI層の間には、これは調査地の地形によるも



第2図 垂水遺跡発掘調査地周辺図(1:5000)



第3図 調査区平面図



第4図 調査区土層断面図

のと思われるが、深く落ち込むような土砂の堆積が認められ、これらの土層の中には、遺物を包含するものもあり、これら土層の幾つかは、調査区に広く堆積するものと考えられる。

b. 遺構

各遺物包含層下において遺構を検出した。第I層下より検出された遺構面を第I面というよう、以下これに準じて各面検出の遺構について記す。

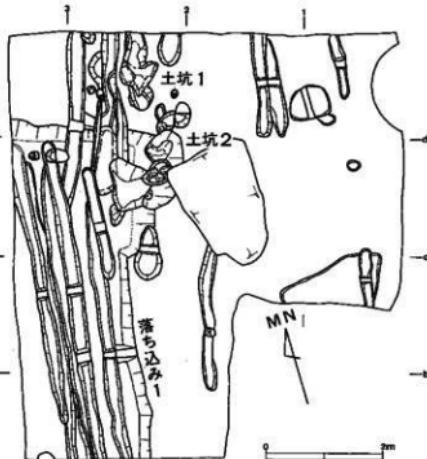
(第I面)

第I面においては、主に南北方向にのびる溝を多数検出した。溝は、幅約20~30cm、深さ約

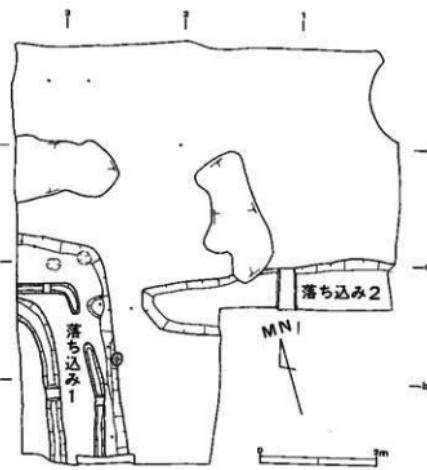
5~10cmを測り、その方位は、多くがN 8° Eを示し、他にN 15° Eとやや東よりにのびるものがあった。これらの溝は調査区西側において密集して検出され、数条もの溝が重複する状況がみられた。また、これらの中には、調査区西側に広がる落ち込み1上に重複する形で検出された。この落ち込み1は、次の第II、III面での検出状況を踏まえると、何らかの意図をもって落ち込み状の区画として整えられ、その区画内に溝が設けられたものではないかと考えられる。恐らく、溝がほぼ同一方向に多数のびる状況から、耕作に関連する遺構ではないかと考えられる。

そして、落ち込み1は深さ約50cmを測り、その埋土は幾層にもわたって堆積していたが、この落ち込み塊土と第I面のベース層がほぼ同質であったことから、これを明確に区分することが困難であった。このため、第I面検出時において、この落ち込み1を完掘することができず、第II、III面検出時において、それぞれの面で落ち込み1の中層部と下層部を検出することとなった。

第I面においては、この他、土坑やピット等を検出したが、土坑1、2は不定形で粗い砂を埋土しており、人為的に掘削されたものではなく、流水等に伴い、斜面上方から流れ込み、土坑状に堆積したものではないかと考えられる。



第5図 遺構平面図(第I面)



第6図 遺構平面図(第II面)

(第II面)

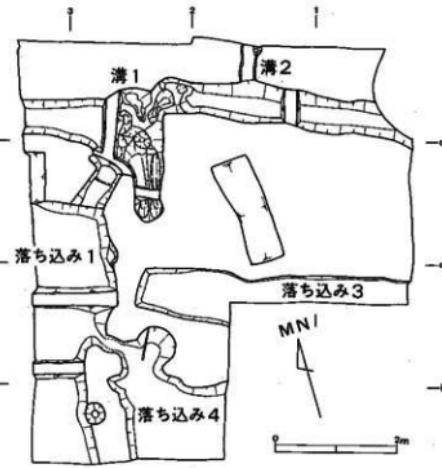
第II層は、先述したように、調査区北側部分において認められた。しかし、調査時においては、調査区南側に堆積する土層も第II層に相当するものと誤断し、調査区南側も面的に同一レベルまで掘削した。その結果、調査区の西側で落ち込みと溝、また落ち込みに沿う形で杭(図6黒点)が検出された。また東側においては溝状の落ち込み2を検出したが、その後の検討で、西側の遺構については、第I面で検出した落ち込み1の中層部に当たるものであり、東側の落ち込み2については、地形的な落ち込みであるとの考えに至った。

そして、第II面では、結果的に第II層に伴う本来の遺構は検出されなかった。しかし、第I面検出の落ち込み1の中層部を検出したことによって、落ち込み1(耕地区画)が一時的なものでなく、ある程度の期間をもって機能していたことがわかった。

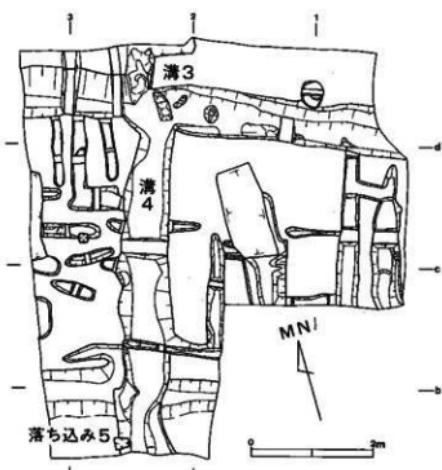
(第III面)

第III層も第II層と同様、調査区北側において堆積するのみであったが、ここでも調査区南側を面的に同一レベルまで掘削したことから、調査区南半で検出した遺構は、落ち込み1の下層部と、地形的な落ち込み(落ち込み3・4)となった。

第III層に伴い、調査区北側で検出した遺構については溝1がある。溝1は東西方向にのび、幅約50~80cm、



第7図 遺構平面図(第III面)



第8図 遺構平面図(第IV面)

深さ約5~15cmを測るが、溝1はその西側よりで土坑状に広がり、やや深くなり（深さ約20cm）、これを境に西側部分が東側のものより約60cm南側にずれてのびていた。これらはともにN68°Wの方位を示していた。また、この溝に交わる形で南北方向にのびる小型の溝2（幅約30cm、深さ約3cm）が検出区北側で検出された。また、土坑状に広がった部分からも南側に溝状の遺構が認められたが、その南側部分が落ち込み1と重なっており、その先の形状は不明である。

（第IV面）

第IV面では、調査区北側で幅約70~80cm、深さ約10~20cmの溝3が東西方向（N68°W）にのび、これと直交する形で南北方向の溝4（幅約60~90cm、深さ約10~15cm）が検出された。そして、これらの溝を主軸として、多数の小溝（幅約10~40cm、深さ約1~5cm）が、東西方向・南北方向にのびる状況で検出された。これら大小の溝は東西、南北方向のものとも方位的には揃っており、耕作関連のものではないかと考えられる。

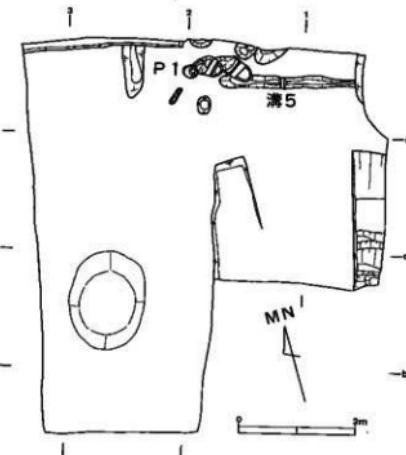
また、調査区南側では、溝4が上に重複する形で落ち込み5が検出されたが、この落ち込みが人為的なものか自然地形によるものかは明確ではない。

（第V面）

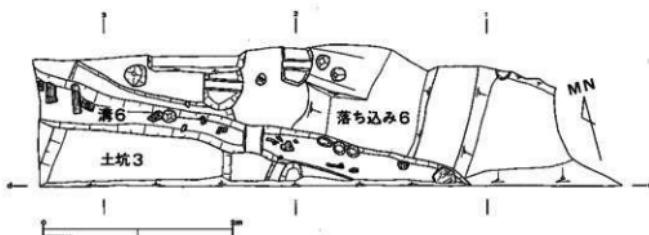
調査区北側部分で第V層を掘削し、調査区北側で遺構を検出した。検出した遺構は溝、土坑、ピット等であるが、溝5は東西方向にのび、幅約20cm、深さ約5cmを測り、方位はN75°Wを示していた。土坑やピットについては、形状や方位等に統一性はみられなかったが、柱穴と思われるもの（P1）も検出された。

（第VI面）

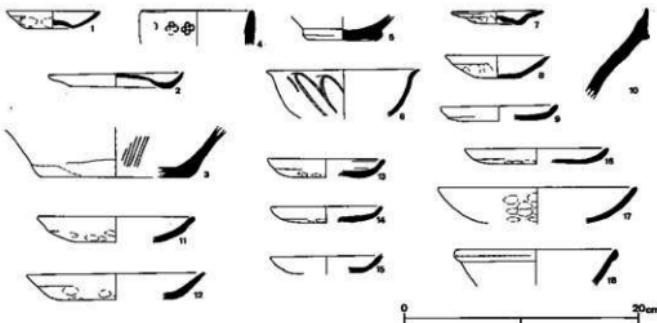
調査区北側約1.5m幅で第VI層を掘削して検出した。溝、土坑、ピット、落ち込み等を検出した。調査区東側で検出した落ち込み6は、検出部で深さ約40cmを測り、落ち込み内からは多数の弥生土器を検出した。また調査区西側では、検出部で方形状を呈する大型の土坑3を検出した。土坑3は検出部で幅約180cm、深さ約5~10cmを測った。そして、落ち込み6と土坑3を重複する形で東西方向にのびる溝6が検出された。溝6は幅約30~50cm、深さ約5~15cmを測り、その方位はN63°Wを示していた。この溝内からは、溝の北肩に4基のピットが検出さ



第9図 遺構平面図（第V面）



第10図 造構平面図(第VI面)



1~3: 土坑1出土、4: 第I層出土、5~6: 第II層出土、7~10: 溝1出土
8~9: 第III層出土、11~15: 第IV層出土、16~18: 第V層出土。

第11図 造物実測図(1)

れ、また、長さ15~31cmの加工材が16個検出された。加工材は、丸木を縦に半截して加工されたもの（12個）と、板状に加工されたもの（4個）とがあった。これら加工材については、溝底に並べられたような状況で検出されたのであるが、これが溝底に意図的に並べられたものであるとすると、これらの加工材は溝の底を一定レベルで揃えることを目的とし、例えば、その溝上に何らかの構造物を建築するための基礎板のような使われ方をした可能性が考えられる。しかし、丸木半截の加工材をみると、そのほとんどが端部の片側が楔状に加工されており、土中にそれを打ち込むのに適した形状をもっていた。今回の調査では、この加工材が溝内の土留めとして使用され、それが土圧等により一定方向に倒れ、溝底に並んだように検出されたという可能性も考えられる。

c. 遺物

(中世：第11図)

第Ⅰ面（層）から第V面上においては、主に土師器、瓦器等を中心とした中世の遺物が検出された。これらは細片が多く、図化できるものは少なかった。1～4は第Ⅰ面、5・6は第Ⅱ面、7～10は第Ⅲ面、11～15は第Ⅳ面、16～18は第V面に伴うものである。

【第Ⅰ面】1・2は土師器皿で、口径は1が約8cm、2が約12cmを測り、1は口縁部をヨコナデ、2は不定方向のナデがみられ、口縁はかなり外傾している。3は陶器すり鉢底部、4は瓦質鉢の口縁部でスタンプ紋がみられる。

【第Ⅱ面】5は白磁碗底部で高台を削り出している。6は青磁碗で外面に花弁紋がみられる。この面からは、この他に土師器や瓦器等も出土している。

【第Ⅲ面】7・8は土師器皿で、口径は7が約8cm、8が約9cmを測り、ともに口縁部はヨコナデされ、口縁は外傾している。9は瓦器皿で口径約10cmである。10は須恵質すり鉢である。

【第Ⅳ面】11～15は土師器皿である。11は口径約14cm、12は約15.5cm、13～15は約10cmとなる。口縁部はヨコナデされ、口縁はやや開き気味である。

【第V面】16・17は土師器皿で、16は口径が約12cm、口縁部ヨコナデ、底部に指頭圧痕がみられる。17は口径約17cm、外面全体に指頭圧痕がみられる。18は白磁碗で玉縁口縁をもつ。

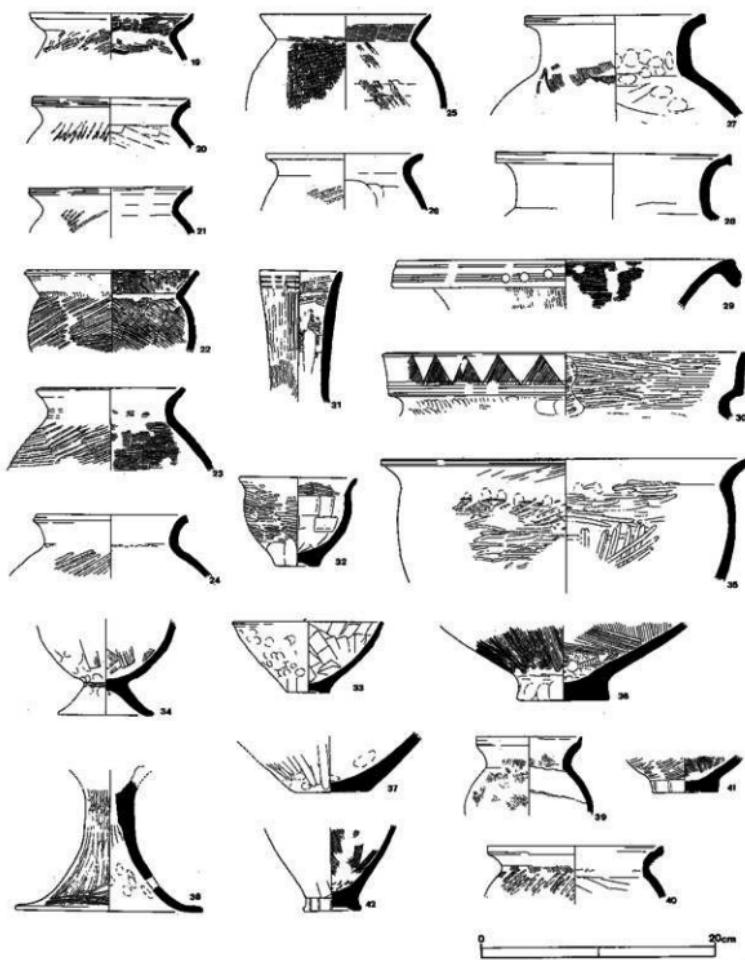
上記の遺物の他、図化できなかった遺物片も併せてみると、第Ⅰ～Ⅲ面検出分については、土師器皿にはへそ皿が多く、また口縁が外傾気味のものが多かった。第Ⅳ・V面検出分については、土師器皿にほとんどへそ皿はみられず、口縁は外傾するが、その開き具合は前者程ではなかった。このことから、第Ⅰ～Ⅲ面と第Ⅳ・V面検出の遺物については、それぞれに時期的なまとまりがあるといえる。

(弥生時代：第12・13図)

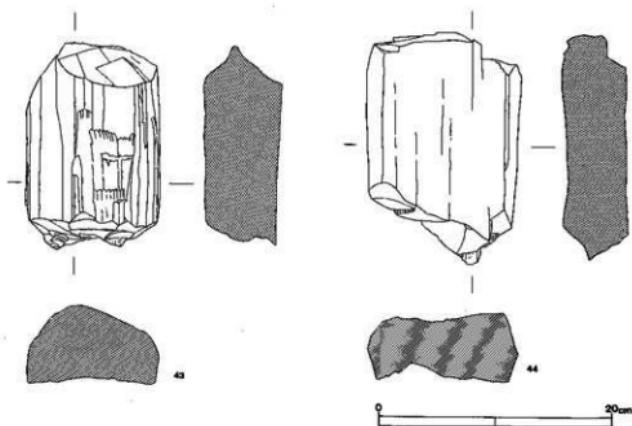
【落ち込み6：19～38】

19～26は甕であり、外面にはタタキ技法がみられ、内面は板片によるナデ（ハケ）調整が施され、ケズリ技法は認められなかった。これらの内、19は口唇部がヨコナデによって上方につまみ上げられ、やや受口状を呈する。この19をはじめとして、他の甕についてみると、その口唇部は大きく3タイプに分かれ、19ほどではないが、ややつまみ上げ気味で外面に端面をもつもの（20、21）。つまみ上げはみられず外面に端面をもつもの（22～24、26）。端面をもたず丸く収めるもの（25）がある。これら甕の中には、口縁部にまでタタキ痕を残すものもあり（19、21）、口縁タタキ出し手法が用いられたと思われる。また25は、外面はタタキの後、ハケ調整が施されている。なお、今回出土した甕については、口縁部から体部・底部にかけて復元できるものはなく、その形態や製作技法を全体的に捉えられるものはなかった。

27～31は壺口縁部である。27・28は広口壺であり、27は体部外面は板ナデ、内面はナデおよび板ナデによって調整されている。ともに口縁部はヨコナデされており、口唇部が外面に端面をもつ。29は口縁部に凹線文が施され、円形浮文がみられる。30は外面に鋸歯紋が施され、内



第12図 遺物実測図(2)



第13図 遺物実測図(3)

面は密にミガキが入る。吉備地方からの搬入品であろう。

32～35は鉢である。32は外面をタタキ、内面を板ナデ調整している。33は外面に指頭圧痕を残し、内面を板ナデ調整している。34は台付鉢であり、内外面とも板ナデ調整が施されている。35は大型の鉢であり、外面はタタキ調整、内面は板ナデ調整が行われ、ともに後にミガキが施されている。

この他、36・37は壺の底部、38は高杯脚部で、外面は密にミガキが施されている。

[土坑3：39]

小型の広口壺である。口唇部はヨコナデによって上方へつまみ上げられ、受口状を呈する。外面は板ナデ調整の後ナデ消しが行われている。内面は、体部については板ナデ調整、口縁部については板ナデ調整の後ナデ消しが行われている。

[第VI層内：40～42]

40は壺口縁部、41は壺底部である。両者とも外面をタタキ、内面を板ナデ調整されている。40の口唇部は、ややつまみ上がり気味で外面に端面をもつ。42は鉢底部であり、内外面とも板ナデ調整がなされている。

[溝6：43～44]

先述したが、溝6内からは2タイプの加工材が検出された。紙数の関係で、ここでは各タイプのものを1点ずつ取り上げた。43は丸木半截タイプのもので、長さ約18cm、幅約11.5cm、厚さ約6.5cmを測り、その端の片側を楔状に削っている。44は板状のもので、長さ約20cm、幅約13cm、厚さ約5.5～6cmを測る。これら加工材の平均的計測値をみると、丸木半截タイプのものは、長さ約19cm、幅約12cm、厚さ約6cmとなり、板状のものについては、平均幅約11cm(う)

ち1点は約7cm)、厚さ約5cmとなるが、長さについては、44以外では、約20cm、約27cm、約31cmとやや幅がみられる。

3. まとめ

今回の調査では、第I～V面においては中世、第VI面においては弥生時代の遺構・遺物を検出することができた。

中世の遺構については、主に南北・東西方向の溝が検出された。これらの溝は方位的に各面でほぼ揃っており、おそらく排水や畠立てなどの耕作に伴うものではないかと考えられる。また、今回の調査地点は、延喜式内社である垂水神社の境内地の隣接地であり、垂水神社との関連性も推測できるが、この点については今後の周辺での調査に期待したい。

弥生時代の遺構・遺物については、従来、垂水遺跡では本調査地背後の丘陵上に竪穴式建物跡等が検出されており、高地性集落として知られているところである。その時期としては、弥生前期の遺物片が少量認められてはいるが、第四様式段階になって出土遺物の器種構成が豊富となり、第五様式段階、特にその後半になって出土量が群を抜くようになって、その頃が遺跡の最盛期になると考えられている。吹田市史第8巻では、発掘調査及び遺跡内採集資料等を整理し、上述のような時期的流れをまとめ、また採集資料の甕の中には庄内式併行期に相当するものも含まれる可能性を指摘している。残念ながら今回は完形となる遺物を得ていないので、その形態や製作技法を細かく検討することができないが、甕の口縁部の形態をみると、いわゆる伝統的第五様式系甕と目されるものが多く含まれる。今回の出土遺物を森田編年でいうと第VI～2様式にはほぼ相当すると思われる。これを庄内式併行期と捉えるかどうかは議論の分かれるところであるが、今回の発掘調査で一括資料として、これらの時期に相当すると思われる資料が得られたことは、今後、垂水遺跡の時期的推移を考える上で貴重な成果を得たものといえる。また、遺構については、特記するものとして、加工材を伴う溝が1条検出された。この溝については、加工材が用いられて何らかの構造を有していたものと考えられるが、今回の発掘調査地点が丘陵のちょうど裾部に当たり、この溝が丘陵の傾斜方向とほぼ直交する方向でのびていることから、丘陵上に建物跡が存在することも勘案すると、この溝は弥生集落の中での何らかの範囲(区画)を示していたものかもしれない。しかし、今回は調査範囲が限られたものであったため、これ以上の言及は差し控え、今後の調査に期待したいが、遺構に関しても垂水遺跡を今後議論する上で重要な資料を得たといえよう。

[参考文献]

- 森田克行「各地域の様式編年・摂津地域」、寺沢薰他編『弥生土器の様式と編年』、1990年。
森岡秀人他編『庄内式土器研究 X II』、1996年。
奈良県教育委員会編『矢部遺跡』、1986年。
吹田市史編さん委員会編『吹田市史』第8巻、1981年。
米田敏幸「土師器の編年 近畿」、石野博信他編『古墳時代の研究』第6巻、1991年。

第3章 昭和町遺跡B地点の発掘調査

1. 調査の経過

今回の調査は、吹田市昭和町1281-15、16において実施したものである。平成9年4月21~26日に調査区を設定し、順次機械掘削、人力掘削を実施した。調査面積約72m²である。その結果、古墳時代のピット・落込み等の遺構を検出するとともに、古墳時代の土師器・須恵器等の遺物を検出した。これらの写真撮影・図面作成等の記録作成後、埋め戻しを行い調査を終了した。

2. 調査の成果

a. 基本土層序

調査区の土層序は、Ⅰ層 盛土（現代）、Ⅱ層 耕土（現代水田）、Ⅲ層 灰褐色粘質土・灰色粘土、Ⅳ層 暗褐色・黒色粘土（古墳時代遺物包含層）、Ⅴ層 灰白色粘質土（地山、古墳時代遺構検出）である。Ⅴ層でピット・落込み遺構を検出した。

b. 遺構

（ピット）

大小合わせて47基確認した。径約10~30cm大のもので、調査区の北東部及び南半部に比較的集中して検出された。北東部のピット群のP1~P7は径約10~20cm、深さ約3~5cm大の小規模のもので一直線に並び、杭列と考えられる。P6~8~10はP1~P7のピット列の方向に直角に一直線に並んでいることから関連のある杭列と考えられる。その他、南半部に集中しているが、規則性は認められなかった。

（落込み）

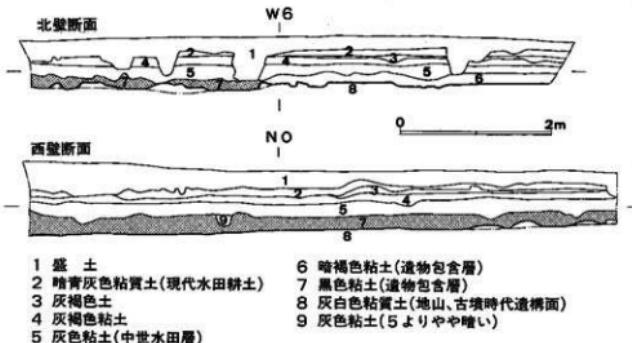
調査区の南西部で検出し、南西に緩やかに落ち込むものである。深さ約14cmを測る。



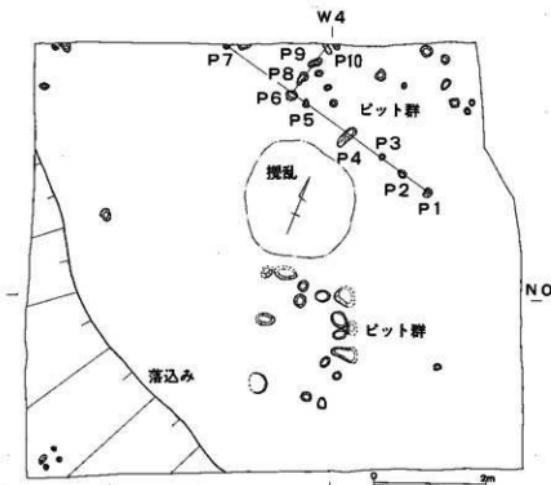
第14図 昭和町遺跡B地点・高畠遺跡発掘調査地周辺図 (1:5000)



第15図 調査区平面図



第16図 調査区土層断面図



第17図 遺構平面図

c. 出土遺物

造構・遺物包含層から少量の土器片が出土した。造構からは土師器・須恵器が出土したが、細片のみで図化できなかった。遺物包含層からは古墳時代の土師器（甕、高杯、瓶）、須恵器（甕、杯、鉢）等の破片が出土した。ここでは図化できた主な遺物の概略を記す。

(遺物包含層出土遺物)

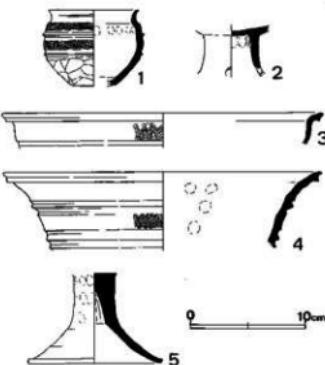
(1)は須恵器鉢である。復元口径7.8cm、器高6.7cmを測る。弱く「く」の字状に屈曲する口頸部をもち、口縁端部はやや鋭い。体部にやや鋭い2条の突帯を巡らし、頸部下と突帯の間にそ

れぞれ櫛描き波状文を施す。体部下半部は手持ちヘラケズリを行い、底部は平底である。(3)は須恵器鉢の口縁部である。やや強く「く」の字状に屈曲する口頸部をもち、口縁端部は外面が凹面をなす。頸部には櫛描き波状文(9条)を施す。復元口径28.2cm、残高2.8cmを測る。(2)は須恵器高杯の脚部破片で円孔が認められる。残高4.5cmを測る。(4)は須恵器甕の口縁部破片である。復元口径28.0cm、残高6.8cmを測る。外上方に外弯気味に伸び、端部は外面が凹面をなす。2条ずつの突帯が現状2段にわたって巡らされており、その間に櫛描き波状文(11条)を施す。(5)は土師器高杯の脚部である。裾部復元径11.8cm、残高8cmを測る。脚部は挿入技法によるもので、外面上部は押圧調整、裾部はナデを行う。出土した遺物のうち、須恵器は陶邑古窯跡群の編年(中村編年)のI型式2~3段階に相当するものである。

3. まとめ

今回の調査では明確な遺構としては杭列の一部と思われるビット群及び落込み等の遺構と初期須恵器等の遺物を検出した。検出遺構は集落跡の一部とみられ、その時期は出土遺物から中村編年のI型式2~3段階のものと思われる。これに近い時期の遺跡は周辺では昭和町遺跡でも認められ、落込み遺構から中村編年のI型式1段階の須恵器杯蓋が出土した。両遺跡は時期が近く、約70mの近距離に所在することから一連の遺跡と考えられ、昭和町一帯に古墳時代中期の集落が展開する可能性が高いといえる。当遺跡の性格については判断できる資料に恵まれておらず、可能性のあることについて記すこととする。

周辺で他に同時期の顯著な遺跡として、千里古窯跡群が北側の千里丘陵に展開する。ここでは本格的な須恵器生産は6~7世紀に行われたが、初期須恵器の生産も行われていたことが確認されつつあり、時期的に該当するところがある。また、当地域の須恵器生産の本拠地は須恵器窯と燃料薪との関係からの考察により、丘陵南縁から東方にかけての丘陵縁辺部であるとする意見⁽¹⁾があり、当遺跡は位置的にも該当することから須恵器窯跡群の本拠地の一部である可能性が指摘できる。須恵器窯跡群周辺で須恵器の製作・搬出入に関わったと見られる集落については陶邑古窯跡群周辺でのいくつかの検出例⁽²⁾の他、千里丘陵においても豊中市新免遺跡で認められる⁽³⁾など各地で近年類例が増加しつつある。それらの内容については居住だけでなく居住と須恵器工房を伴うもの、また須恵器の集荷・選別・出荷など流通に関わるものもある。今回の調査では明確に須恵器窯跡群との関連を想定できる遺構・遺物等を検出できなかつたが、



第18図 遺物実測図

今後確認できる可能性が残されており、周辺の調査の進展に期待したい。最後に当遺跡と一連のものと思われる昭和町遺跡出土遺物の概要を紹介することとしたい。

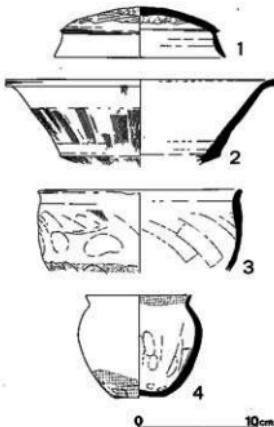
＜昭和町遺跡出土遺物＞

昭和町遺跡は平成6年、昭和町1418-6で基礎掘削工事の立会時に新たに発見された遺跡である。地表下約0.7mの砂礫層（地山）面で径約3m、深さ約0.15mの円形の土坑状落込み、20~25cmのピット2基が検出され、土坑状落込みの堆積層から土器類が合計コンテナ1箱分出土した。土器類の内訳は、土師器高杯・鉢、須恵器杯蓋等がある。このうち、遺存状態の良好なものを図示し、述べることとする。

(1)は須恵器杯蓋である。天井部は低く、中央部からならだかに下がり、外反気味に外下方に伸びる口縁部を有する。口縁部と天井部の境は断面三角形のやや鋭い稜が水平に伸びている。天井部は手持ちヘラケズリ、内面天井部も手持ちヘラケズリを施し、他は回転ナデ調整がなされている。口径14.5cm、器高4.3cmを測る。(2)は土師器高杯の杯部である。2段に屈曲する口縁端部は端面を有し、外端面には強いヨコナデがなされ、弱い凹面をなす。須恵器口縁端面の調整技法に近似する。外面タテハケの後ヨコナデが施される。口径23.0cm、残高7.3cmを測る。(3)は土師器鉢である。短く「く」の字状に屈曲する口縁部と丸みをもった体部で底部はやや上がり底気味の平底である。外面ヨコナデ、内面押圧の後ナデ調整を行う。口縁内面と体部外下面下半に黒班が認められる。口径17.0cm、残高7.0cmを測る。(4)は土師器鉢である。弱く外反する口縁の端部は弱い端面を有す。体部外表面は押圧調整、内面はヘラケズリを施す。体部下半に黒班が認められる。口径8.8cm、器高8.7cmを測る。

[註]

- (1)藤原 学「須恵器窯と燃料薪」「関西大学考古学研究室開設四十周年記念 考古学論叢」
1993年。
- (2)中村 浩「須恵器窯跡の分布と変遷」 1992年。
- (3)山元 健「須恵器生産の始まりと集落－大阪府千里古窯跡群と新免遺跡－」「大阪府埋蔵文化財協会 研究紀要3－設立10周年記念論集－」 1995年。



第19図 昭和町遺跡出土土器実測図

第4章 都呂須遺跡の発掘調査

1. 調査の経過

今回の発掘調査は専用住宅の建築に伴うもので、平成9年5月15日から6月10日にかけて調査を実施した。発掘調査は、排土置場の関係から調査区を3分割して行った。

2. 調査の成果

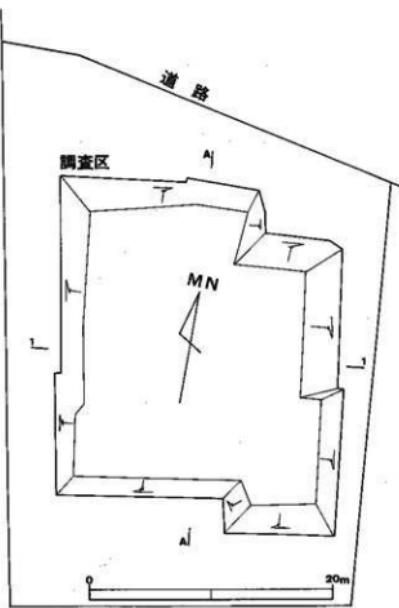
都呂須遺跡は吹田砂堆上に位置し、遺跡一帯では黄色砂が地山層として確認される。今回の調査においては、この黄色砂層（第12・13層）の上に遺物包含層として暗黄褐色砂層（第11層）が確認され、地山層をベース面として遺構が検出された。

遺構は、溝、土坑、ピット等を多数検出したが、特徴的なものとして大型の土坑が多数検出された。これらの大型土坑は、径が約1~1.5mの円形を呈するものと、不定形で最大長が約2~4mを測るもののがみられた。また、調査区の北側では、大溝が1条検出された。溝は磁北とほぼ直交する方向で東西にのび、幅約3m、深さ約0.6~1mを測った。そして、溝は調査区西側で北側へ屈曲するか、その幅を広げるような様相をみせていた。またこの他、多数のピットを検出したが、建物跡として確認できるものはなかった。

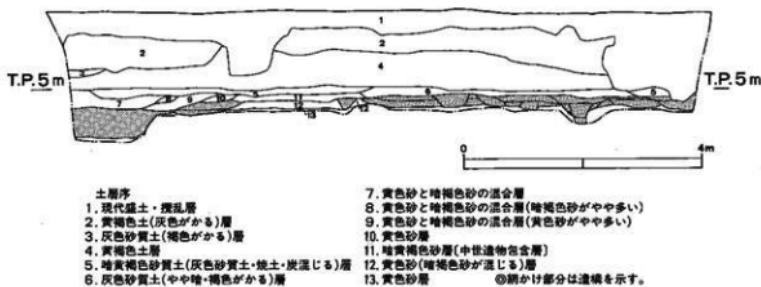
遺物については、弥生土器片などもあったが、そのほとんどは中世のもの



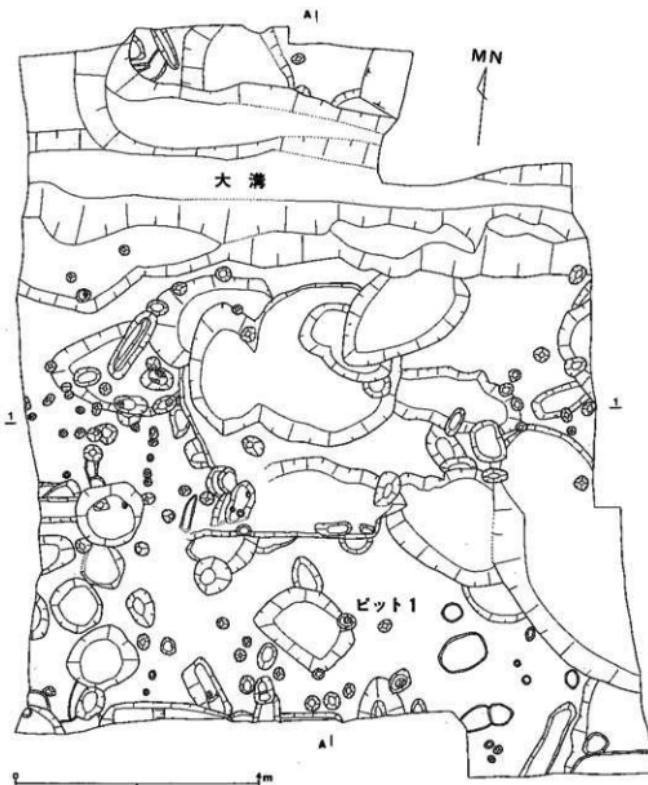
第20図 都呂須遺跡発掘調査地周辺図 (1:5000)



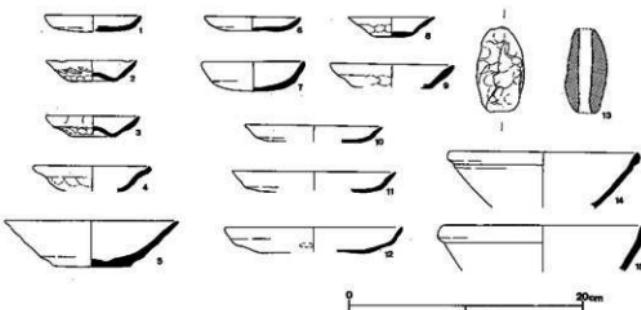
第21図 調査区平面図



第22図 調査区南壁土層断面図



第23図 遺構 平面図



1～4：大溝出土、5：ピット1出土、6～15：遺物包含層内出土。

第24図 遺物実測図

で、土師器、瓦器等を多く検出した。1～4は大溝内出土の土師器皿である。1は口縁部ヨコナデ、底部は未調整、2～4は口縁部ヨコナデ、底部には指頭圧痕がみられる。5はピット1内出土の土質土器で、ロクロ成型により底部には糸切り痕が残る。6～15は遺物包含層内出土遺物である。6～12は土師器皿であり、口縁部の調整はヨコナデにより、8・9には指頭圧痕がみられる。14・15は白磁碗で玉縁口縁をもつ。13は土鍤である。今回出土した土師器皿は、その口縁部が外反気味に開くもの多かった。

3. まとめ

今回の調査においては、中世の遺物を伴い多数の遺構を検出した。特に、大型土坑を多数検出したが、このような大型土坑は、これまでの都呂須遺跡内での発掘調査においても多数検出されている。この種の土坑の性格については現在のところ明らかではないが、都呂須遺跡においては特徴的な遺構であるといえる。また、大溝を1条検出した。この溝については、そのベース層が浸透性の高い砂層であり、また溝埋土にも砂の堆積が認められたが、その砂粒はほぼ均質であり、流水等の水成作用による堆積とは考えにくく、この大溝自体は排水（配水）等を目的としたものではなく、何らかの区画、例えば耕作地や屋敷地等の区画を目的に設けられたものではないかと思われる。

以上、今回の調査では不明な点も多いが、大型土坑や大溝等、今後都呂須遺跡を考えいく上で、留意するべき成果を得たものといえる。

第5章 高城遺跡の発掘調査

1. 調査の経過

今回の発掘調査は、個人住宅の建築工事に伴う調査である。吹田市高城町1384-1を対象として、平成9年9月2~11日にかけて実施した。調査は工事予定地内に12m×7mの調査区を設定し、重機および人力により掘削した。その結果、古代から近世後期にわたる遺構・遺物を検出し、写真撮影、検出遺構および土層断面図等の記録作成を行って終了した。なお調査地周辺岡については、第3章・昭和町遺跡の項にまとめて掲載した。

2. 調査の成果

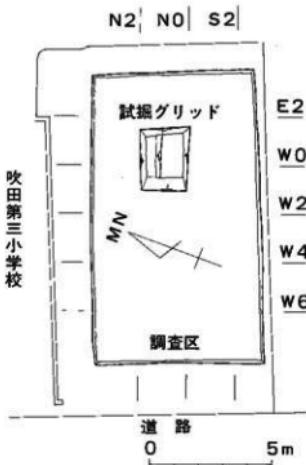
(1) 基本土層序

調査区内の基本土層序は、現代盛土層（第Ⅰ層）、暗灰色細粒砂質シルト層（第Ⅱ層：旧耕土）がほぼ水平に堆積し、調査区東側付近で僅かに傾斜しながら灰白色シルト層（第Ⅲ層）、淡茶褐色シルト質粘土層（第Ⅳ層）が堆積し、明青灰色~明黄褐色粘土層（第Ⅴ層：地山）に達する。このうち第Ⅱ層中に、近世後期を下限として古代・中世の土器類を含む遺物包含層を形成する。第Ⅲ・Ⅳ層は今回の調査では、遺物の出土をみなかった。第Ⅴ層は周辺での調査例から地山と考えられる。

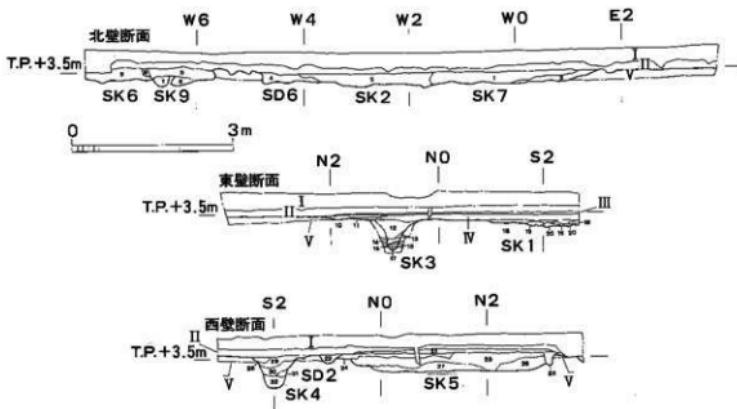
(2) 遺構

発掘調査では地山をベース層とし、同一面において古代から近世後期にわたる遺構を検出した。検出面はT.P.+3.4m前後、現地表下から約60cmの地点である。検出遺構は先行して実施した試掘調査の成果も含めると、小穴27基（うち柱痕4基、柱の抜き取り痕3基）、土坑11基、溝11条を数える。全般的に出土遺物は細片が多いため、年代決定が困難であるが、遺構の重複関係や堆積土の状況から、大きく奈良以前・平安・鎌倉・江戸後期の4時期に比定できる。

奈良期以前の遺構がSK1・2、SD1に相当する。SK1は東西157cm以上、南北180cm以上、深さ5cmを測る。堆積土は上層が第Ⅳ層に



第25図 調査区平面図

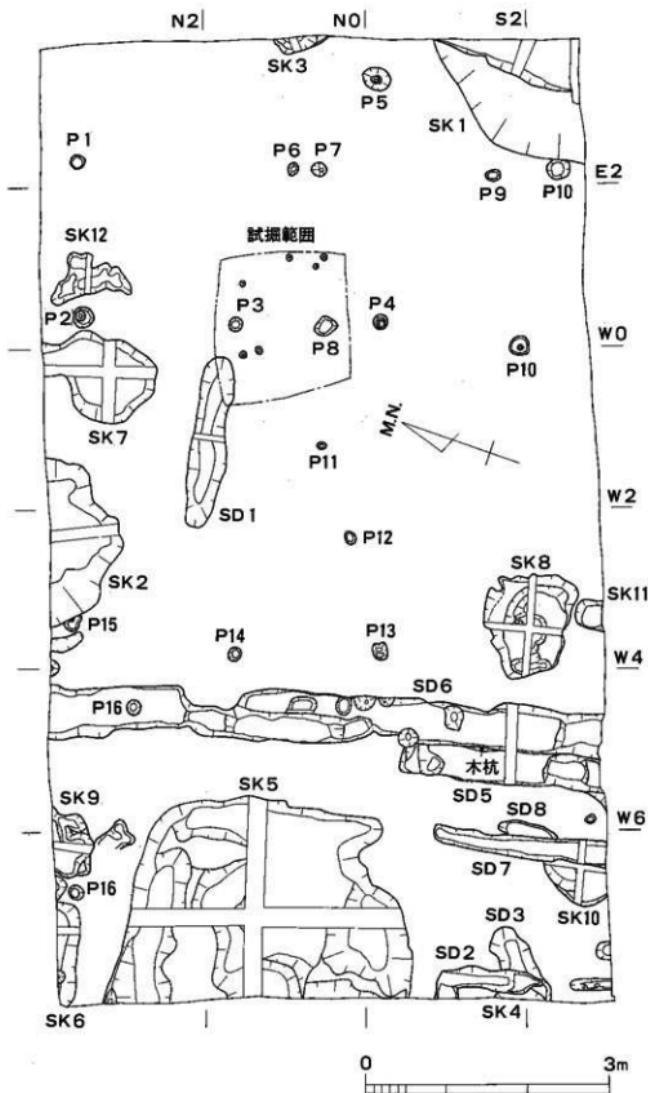


第Ⅰ層 現代の盛土	8. 灰白色シルト	20. 灰白色シルト
第Ⅱ層 暗灰色細粒砂質シルト(白粘土)	9. 灰褐色シルト質粘土 (堆積物に少々含まれてゐる)	21. 灰色細粒砂質シルト
第Ⅲ層 灰白色シルト	10. 灰褐色シルト	22. 灰白色シルト
第Ⅳ層 淡茶褐色シルト	11. 黑褐色シルト質粘土	23. 墓灰色シルト
第Ⅴ層 明青灰色～明黄褐色粘土(白山)	12. 黑褐色粘土	24. 灰色シルト (鉄化マンガン斑が入る)
1. 反褐色シルト	13. 灰褐色粘土	25. 墓灰色シルト
2. 反褐色シルト (黒褐色粘土ニコロクを多く含む)	14. 灰褐色粘土 (白山ブロックを含む)	26. 灰色粘質シルト (堆積物に少々含まれて、鉄化マンガン入る)
3. 反色シルト	15. 黑褐色粘土 (白山ブロックを含む)	27. 反色粘質シルト (白山ブロックを多く含む)
4. 反白色粘土 (白山ブロック土を含む)	16. 黑褐色粘土 (白山ブロックを多く含む)	28. 灰黄色シルト (墓灰色粘土ブロックを少し含む)
5. 反白色シルト	17. 黑褐色粘土	29. 黑褐色粘土ブロック土
6. 反色粘土 (鉄化マンガン斑が少し入る)	18. 黑褐色シルト質粘土 (鉄化マンガン斑が少しうる)	30. 黑褐色シルト質粘土
7. 明灰色粘土 (鉄化マンガン斑が少し入る)	19. 灰白色シルト (鉄化マンガン斑が多く入る)	31. 明黄褐色シルト質粘土 (墓灰色粘土ブロック土を含む)
		32. 黑褐色シルト質粘土 (白山ブロック土を含む)

第26図 調査区土層断面図

近く、下層は明灰色シルトが主体で、平安期より以前の土師器・須恵器の細片が出土した。SK2は平面亜円形で東西211cm、南北90cm、深さ7cmを測る。堆積土は黒褐色粘土ブロックを多く含む灰色粘土で、古墳期の製塙土器と、黒色土器の細片が出土した。SD1は全長215cm、最大幅46cm、深さ10cmを測り、主軸の方位はN80°Wである。堆積土は灰色砂質シルトで、土師器の細片が出土した。

平安期の遺構がSK3・4と小穴群に相当する。P1～P4は主軸の方位がN18°Wで、1.9m前後の間隔でL字状に並び、掘立柱建物もしくは柵列が想定される。P2は掘方径25cm、柱痕径14cm、深さ15cmを測り、P4は掘方径20cm、柱痕径10cm、深さ32cmを測る。堆積土は柱痕内が黒褐色粘土、掘方埋土が黒褐色粘土混じりの地山ブロック土である。SK3は東西17cm以上、南北63cm、深さ34cm以上で、SK4は東西17cm以上、南北63cm、深さ50cm以上を測る。



第27図 造構平面図

共に断面形は逆台形で、堆積土は黒褐色粘土中に地山ブロック粒が層理状に入る。

鎌倉期の遺構がSK3～5、SD2・3に相当する。SK5は平面隅丸方形を呈し、東西250cm以上、南北372cm、底面は複雑な起伏を呈し最深部で27cmを測る。堆積土は地山ブロック土を含む茶褐色粘土で、土師質のすり鉢・小皿と瓦器の細片が出土した。

江戸期の遺構がSD4～10、SK6～8に相当する。SK6は最大幅で東西132cm、南北124cmで、底面には複雑な起伏があり最深部で19cmを測る。南北方向の小溝列は主軸をN15°Wにとり、SD5は幅60cm、深さは最深部で24cmを測る。断面形は箱形ないしはプラスコ状を呈し、底面はテラス状や小穴状を呈する複雑な起伏を有する。SD4の東壁面には、自然木に近い丸杭が1本打ち込まれていた。いずれの遺構も堆積土は軟質の暗灰色～青灰色粘土が主体で、唐津焼・京焼系等の陶磁器類や近世瓦が出土した。

(3) 遺物

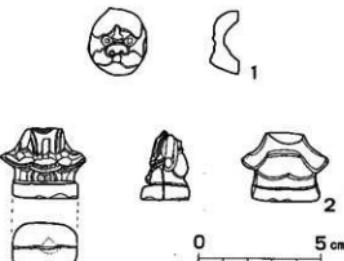
出土遺物には土師器・須恵器・製塙土器・瓦器・近世の陶磁器・瓦・土人形・時期不明の漆器椀などがあるが、細片が多く、図化できたものは僅かである。1はSD8より出土の土人形の顔面部で、縦2.7cm、横2.4cm、幅1.2cmを測り、色調は灰白色を呈する。江戸時代後期の陶磁器類や瓦と共に伴する。2はSK8より出土の天神と思われる陶人形である。首部を欠損し、側面に型の合わせ目が残る。全高2.9cm、全幅3.5cm、奥行き2cmを測り、色調は浅黄色で、全体的に黄緑色の釉薬の痕跡が残る。

3.まとめ

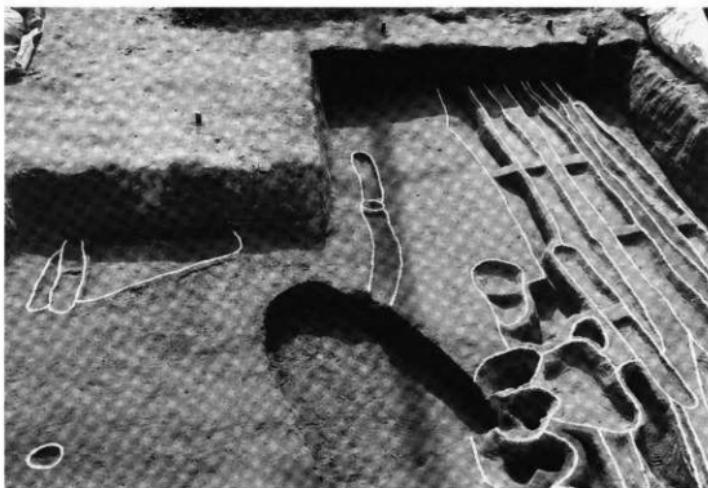
今回の調査では、奈良期以前から江戸後期にわたる遺構を検出することができた。

平安期の遺構としては、柱穴を含む小穴群を検出した。柱穴列の存在から、掘立柱建物が想定でき、当地が居住域として利用されていたことを物語る。これ以外にも、奈良期あるいは鎌倉期から江戸期にかけての土坑や溝を多數検出したが、明確に性格付けを行うことは困難であった。たとえば江戸期の素掘り溝についてみても、形状や堆積土の状況から判断して、耕作溝とは考えがたく、その用途については不明と言わざるをえない。

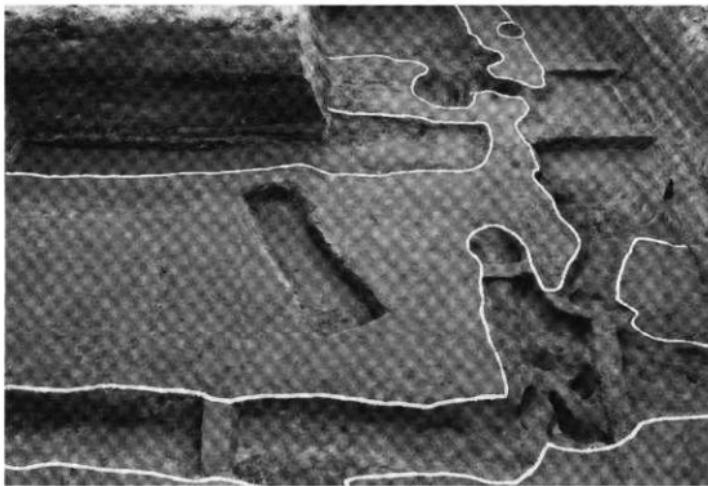
今回は調査面積が限られていたこともあり、遺構の性格付けを明らかにできたものは少ないが、古代から近世にかけて、連續と生活を営んだ痕跡を確認できた意義は、大きいといえる。



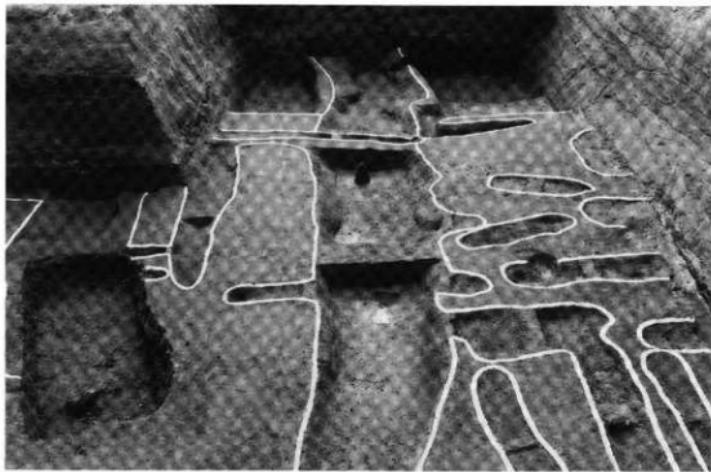
第28図 遺物実測図



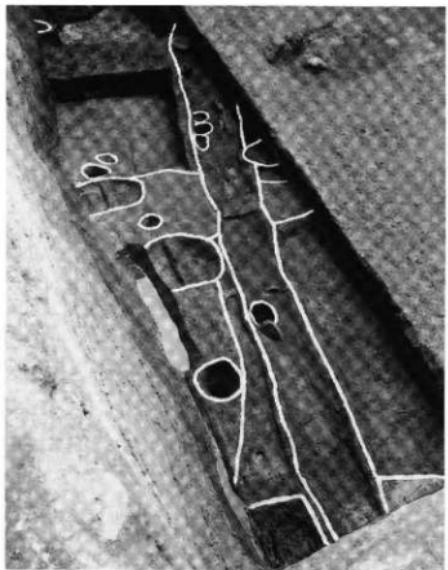
遺構第1面（北から）



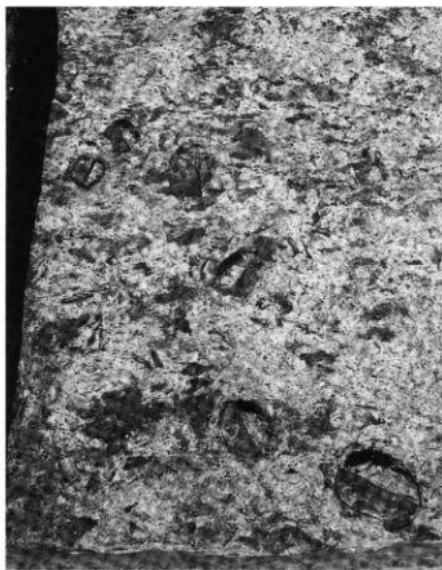
遺構第4面（北から）



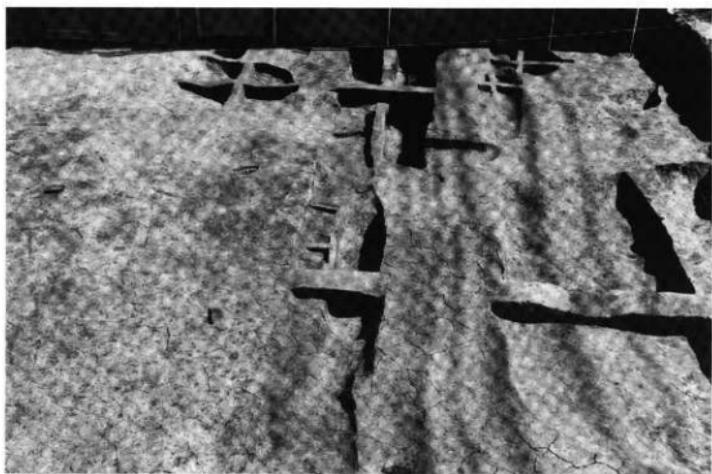
遺構第IV面（北から）



遺構第VI面
(西から)

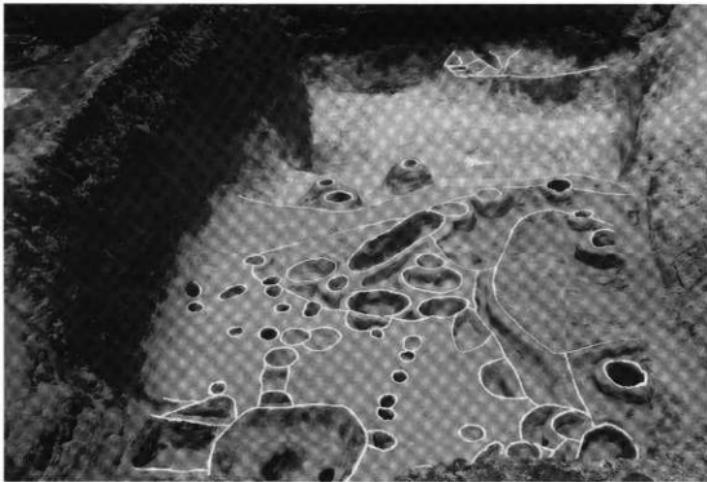


昭和町遺跡B地点
検出ピット群（北から）

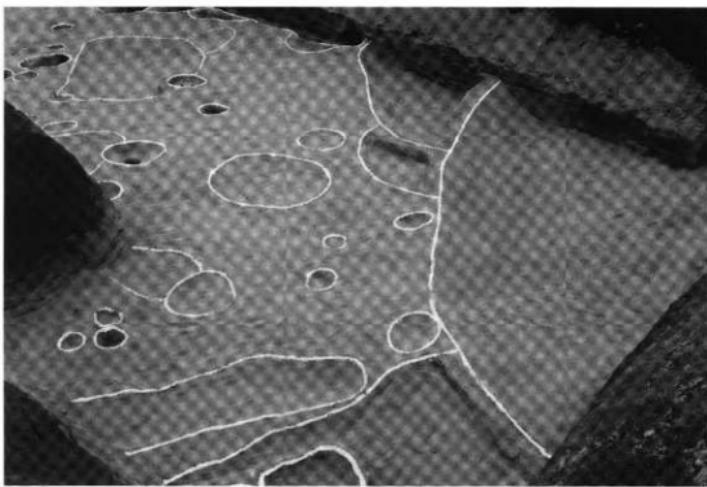


高城遺跡調査区西半部（北から）

図版四
都呂須遺跡



調査区西北部（南から）



調査区南部（南東から）

〔平成 9 年度〕

埋蔵文化財緊急発掘調査概報

垂水遺跡

昭和町遺跡B地点

都呂須遺跡

高城遺跡

平成 10 年 3 月 31 日

編集 吹田市泉町1丁目3番40号
発行 吹田市教育委員会